

科学技術連携施策群「新興・再興感染症」提言（案）
“BSL-4 施設建設による新興・再興感染症研究体制強化の必要性”

はじめに：

1945 年以降、最も重篤な感染症であるクリミア・コンゴ出血熱、マールブルグ出血熱、ラッサ熱、エボラ出血熱等が登場し、現在も流行が繰り返され、我が国でも真性ラッサ熱（1987 年）をはじめ疑い例が発生している。また、2001 年の炭疽菌テロ事件以来、既に根絶された痘瘡ウイルスを用いたテロに対する警戒態勢もとられている。これらの重篤感染症の病原体は、バイオセーフティーレベル 4 施設（BSL-4 施設）で、適切に病原体を封じ込めて安全に扱われねばならない。交通網の発達により、これら重篤感染症の我が国への侵入や微生物を用いたテロの可能性も想定され、我が国の感染症対策を万全にするために、BSL-4 施設は必要不可欠である。また、洞爺湖サミットにおいても感染症対応の国際協調がうたわれており、今後外国でエボラ出血熱等の発生時に、日本は、診断・研究などの協力が不可欠になる。

世界的には米、英、仏、独など欧米のみならずインド、台湾、南アフリカ、ガボン等に 30 カ所以上の BSL-4 施設が整備され、現在建設中のものもある。我が国でも、1981 年に国立感染症研究所に BSL-4 施設が建設され、また重篤感染症の患者に対応できる病院も整備されてきたが、世界の感染症発生の現状を考慮すれば、我が国の危機管理として、BSL-4 病原体による重篤感染症の診断が可能になることは喫緊の課題である。

連携施策群の補完的課題「BSL-4 施設を必要とする新興感染症対策」の成果：

(1)感染症対策上、病原体検査を行い得る BSL-4 施設が必要である。(2)一方、重篤感染症に対する本質的対策としてまた国際協力の観点からも、基盤的研究（病原体解析、動物実験、治療法開発、ワクチン開発等）もできる、最新の設備を備えた BSL-4 施設を新設する必要がある。(3)新施設建設地域は、大学等の研究施設があるなど科学的基盤が整備されていること、また、地震等自然災害を考慮して複数の BSL-4 施設は互いに地理的に離れたものであることが望まれる。(4)新施設の建設に当たっては、周辺住民、地域の行政とのコミュニケーションを早期からとり、十分な理解を得つつ進める。(5)新施設は国の共同利用施設としての運営がなされるべきである。

提言：

我が国の新興感染症対策を万全にし、先進的な感染症研究を推進するためには、複数の BSL-4 施設が必要であり、国内の患者発生の有事において迅速正確な検査を実施できる既設の BSL-4 施設に加え、世界に先駆けた治療法やワクチン等の基礎・応用研究も可能な、最新設備を有する新たな BSL-4 施設を建設し、それらを活用することが、国民の健康保持と安心安全の確保、および我が国の科学技術の推進にきわめて重要な喫緊の課題である。